
幼馴染

零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染

【Nコード】

N9834A

【作者名】

澪

【あらすじ】

この小説は実話で俺の過去の話です。俺の中学生からの話です。。。恋愛や失恋、大切な人の死など色々な事がありました今とても辛い恋愛をしてる人からラブラブの人全員に見てほしいです

プロローグ

主人公・・澪

俺の家族は離婚してて親父と住んでたけど今は1人暮らしです

この時はまだ中3で学校もほとんどサボってたしタバコも吸って

バイクを乗り回しピアスしてて眉も細く髪は茶とか金。

喧嘩も好きで服もダボばかりで皆から言われてた言葉はヤンキー
やホストみたいなど・・

まあこんな俺ですけどよろしく・・

幼馴染・・あみ

見た目はギャル！！髪は金にメッシュが入ってる

化粧も仕方も綺麗でモデル。

ダチ・・秀仁ー隆ー誠ー翔汰ー亮

皆見た目はヤンキーだけど皆優しい

愛ーありさー彩耶香ー里奈

見た目はギャル。

後輩・純一龍壺一亞津一幸一

先輩・進サン一心サン一雄介サン一健太サン一竜太サン

かなり優しい先輩達ばかり

この話は本当にあつた事です

書き方は下手ですけど読んでください

第二話・・あみ

俺はいつものようにゴロゴロしてた。

「暇〜何で皆遊んでくれないんだよ・・泣」

俺は中3の15才

名前は漑で顔もまあまあイケてる方で

はつきり言つてモデル。。。。

そんな俺は1人の女に恋をしてる

それもなんと3年間の片想い（泣）

その人は幼馴染のあみ！！

顔も可愛いく学校1の可愛さ（照／＼）

やっぱ、あみは「可愛い」な〜

って思っていると電話がなった・・・

プルルル〜♪♪

漑「もしもし」

あ「・・・・・」

漣「あみ！？？」

あ「グスツ……………」

漣「泣いてんの？？」

あ「漣……………」

漣「なんかあつたん？」

あ「…………グスツ」

漣「今どこおると？」

あ「ローソンの裏……」

漣「分かった。そこ動くなよ！！」

あ「うん」

俺は急いでチャリに乗って急いだ！！

ローソンにつき裏の方に行くとあみがベンチに座っていた

漣「あみ〜大丈夫？？」

あ「漣……」

漣「どうしたんだよ…………？」

あ「あのね・・・レ・・・イ・・・プ・・・された（泣）」

漣「嘘だろ・・・!!」

あみは顔を下げたまま話した。

あみは今日彼氏とデートをしていた。

デートも終えて彼の家に行こうと思ってたらしい・・・

そしたら後ろから呼び止められたらしい

そしてあみは、その男に連れて行かれそうになった。

あみは彼氏の凜の名前を読んだが彼氏はいなかったらしい

彼氏は逃げていたのだ・・・最低な男だな!!

そしてあみは、その場で服を脱がされた

そうレイプだ!!!

あみは「体を汚された」と小さい声で言った。

俺はその話をずっと、あみの目を見ながら聞いた。

話を終わった時には、あみは泣いていた。

漣「歩ける??」

あ「無理・・・」

漣「寒いやる!!これ着とけ!!」

第二話・・・あみ（後書き）

俺はいつものようにゴロゴロしてた。

「暇〜何で皆遊んでくれないんだよ・・・泣」

俺は中3の15才

名前は漑で顔もまあまあイケてる方で

はつきり言つてモデル。。。。

そんな俺は1人の女に恋をしてる

それもなんと3年間の片想い（泣）

その人は幼馴染のあみ！！

顔も可愛い学校1の可愛さ（照／＼）

やっぱ、あみは「可愛い」な〜

って思っていると電話がなった・・・

プルルル〜♪♪

漑「もしもし」

あ「……………」

漣「あみ！？？」

あ「グスツ……………」

漣「泣いてんの？？」

あ「漣……………」

漣「なんかあつたん？」

あ「…………グスツ」

漣「今どこおると？」

あ「ローソンの裏……」

漣「分かった。そこ動くなよ！！」

あ「うん」

俺は急いでチャリに乗って急いだ！！

ローソンにつき裏の方に行くとあみがベンチに座っていた

漣「あみ〜大丈夫？？」

あ「漣仁……」

漣「どうしたんだよ…………？」

あ「あのね・・・レ・・・イ・・・プ・・・された（泣）

漣「嘘だろ・・・!!」

あみは顔を下げたまま話した。

あみは今日彼氏とデートをしていた。

デートも終えて彼の家に行こうと思ってたらしい・

そしたら後ろから呼び止められたらしい

そしてあみは、その男に連れて行かれそうになった。

あみは彼氏の凜の名前を読んだが彼氏はいなかったらしい

彼氏は逃げていたのだ・・・最低な男だな!!

そしてあみは、その場で服を脱がされた

そうレイプだ!!!

あみは「体を汚された」と小さい声で言った。

俺はその話をずっと、あみの目を見ながら聞いた。

話を終わった時には、あみは泣いていた。

漣「歩ける??」

あ「無理・・・」

漣「寒いやる!!これ着とけ!!」

第3話・・・コンビニの裏

俺はあみに着ていたスカジャンを着せた

あ「ありがとう」

漣「おう!」

グ「・・・お腹がなった(恥)」

漣「腹減った〜腹減ってない??」

あ「ちよつと」

漣「なんか買ってくる」

おれが行こうとした時

あみが俺の手を握った。。。。

俺はドキッとした

漣「どうしたん!??/」

あ「怖いから行かないで!!」

グ「あみのお腹がなった・・・・・・・・」

漣「すぐ帰ってくるから何かあったら叫べ」

あ「すぐ帰ってきてよ・・・」

漣「うん!!」

俺は急いで行き、おにぎり2個とミルクティーを買って

あみの所へ急いだ

あみは震えていた

漣「あみ」

おれは明るく声をかけた

あみは頑張っ て笑ってるつもりだが顔を引きつっていた。

漣「食べな」

あみは食べながら泣いていた

沈黙が続いた

・
・
・
・

漣「大丈夫か??」

あ「・・・」

漣「家まで送って行こうか？」

あ「……れ……」

漣「うん？？」

あ「漣の家に行っていていい？1人嫌で……」

漣「俺はいいけど」

漣「なら行くか」

そして俺はチャリの所まで抱っこして連れていった。

そしてチャリの後ろに乗せた

漣「しっかり握るときな！」

あ「うん」

俺は家につくまでずっとドキドキしていた。

それもあみは俺の腰をギュッと握っていたから

そう思いながらも家に着いた

第3話・・・コンビニの裏（後書き）

俺はあみに着ていたスカジャンを着せた

あ「ありがとう」

漣「おう!」

グ「・・・お腹がなった（恥）」

漣「腹減った〜腹減ってない??」

あ「ちよつと」

漣「なんか買ってくる」

おれが行こうとした時

あみが俺の手を握った。。。。

俺はドキッとした

漣「どうしたん!??/」

あ「怖いから行かないで!!」

グ「あみのお腹がなった・・・・・・・・」

漣「すぐ帰ってくるから何かあったら叫べ」

あ「すぐ帰ってきてよ・・・」

漣「うん!!」

俺は急いで行き、おにぎり2個とミルクティーを買って

あみの所へ急いだ

あみは震えていた

漣「あみ」

おれは明るく声をかけた

あみは頑張って笑ってるつもりだが顔を引きつっていた。

漣「食べな」

あみは食べながら泣いていた

沈黙が続いた

・
・
・
・

漣「大丈夫か??」

あ「・・・」

漣「家まで送って行こうか？」

あ「……れ……」

漣「うん？？」

あ「漣の家に行っていていい？1人嫌で……」

漣「俺はいいけど」

漣「なら行くか」

そして俺はチャリの所まで抱っこして連れていった。

そしてチャリの後ろに乗せた

漣「しっかり握るときな！」

あ「うん」

俺は家につくまでずっとドキドキしていた。

それもある俺の腰をギュッと握っていたから

そう思いながらも家に着いた

第四話・・・俺の部屋

俺達は部屋についた

あみが下の方を見ていたので俺も見た

あみは足を怪我していた。

たぶんレイプされた時だろう。。。

漣「俺下から絆創膏とってくるからソファーに座ったときな」

俺は階段を降り救急箱を持って上に上がった

漣「あみ絆創膏貼るから足かして」

あみは俺の方に足を向けた

俺が貼ろうとして、あみの足に触ると、あみは恐がっていた・・・

漣「あみ！！恐いし辛いかもしれんけど、ここにいるのは俺やから

心配すんな！泣きたいなら泣いてもいい、だから安心しな」

あ「ごめん・・・」

漣「謝るなよ」

俺は絆創膏を貼った。

そしてあみの隣に座り、いつも以上に優しく話しかけた。

そして少しいつものように、からかいながら・

プルルル〜

あみの携帯がなった

あ「もしもし・・・」

あ「大丈夫じゃないし！！なんで逃げたの！！」

俺は電話の相手が誰か分かった。。彼氏の凜だ。

あみは泣いていた

俺はそんなあみを見ながら、じつとしていらなかった

そしていつの間にか、あみから携帯を取っていた。

あ「れ・・・い・・・」

凜「もしもし。。俺あみのダチやけど」

凜「なん??」

凜「お前あみの彼氏やる?」

凜「そうだけとお前に関係なくない」

漣「普通な女が襲われてて逃げる奴いるか？」

凜「……」

漣「女が襲われたら自分がどうなってもいいから守るのが彼氏やろ！！」

自分が好きな奴が襲われてんに逃げるとか、それでも彼氏なんか」

俺は異常にきれていたが、

俺はすっきりした。。

その後あみに携帯を返した。

あ「別れて」

あみはそれだけ言つと携帯を閉じた

その時は夜中の3時を回っていた

漣「別れたの俺のせい？」

あ「違うよ気にしないで！！」

漣「ならいいけど・・・もう寝ようか」

あ「そうだね」漣今日はありがとうね」

漣「気にすんなって！！バカ」

俺ソファで寝るからベッド使いな」

あ「バカってなに！！まあありがとう」

漣「バカは風邪ひかないって言うからベッドじゃなくてもいいと思
ったけど、一応あみ女だからな」藁藁「

あ「バカ」

漣「はいはい。。もう寝るぞ」

第四話・・・俺の部屋（後書き）

俺達は部屋についた

あみが下の方を見ていたので俺も見た

あみは足を怪我していた。

たぶんレイプされた時だろう。。。

漣「俺下から絆創膏とってくるからソファーに座ったときな」

俺は階段を降り救急箱を持って上に上がった

漣「あみ絆創膏貼るから足かして」

あみは俺の方に足を向けた

俺が貼ろうとして、あみの足に触ると、あみは恐がっていた・・・

漣「あみ！！恐いし辛いかもしれんけど、ここにいるのは俺やから

心配すんな！泣きたいなら泣いてもいい、だから安心しな」

あ「ごめん・・・」

漣「謝るなよ」

俺は絆創膏を貼った。

そしてあみの隣に座り、いつも以上に優しく話しかけた。

そして少しいつものように、からかいながら・

ブルルル〜

あみの携帯がなった

あ「もしもし・・・」

あ「大丈夫じゃないし！！なんで逃げたの！！」

俺は電話の相手が誰か分かった。。彼氏の凜だ。

あみは泣いていた

俺はそんなあみを見ながら、じつとしていらなかった

そしていつの間にか、あみから携帯を取っていた。

あ「れ・・・い・・・」

凜「もしもし。。俺あみのダチやけど」

凜「なん??」

凜「お前あみの彼氏やろ?」

凜「そうだけとお前に関係なくない」

漣「普通な女が襲われてて逃げる奴いるか？」

凜「……」

俺はすっかりした。

その後あみに携帯を返した。

あ「別れて」

あみはそれだけ言つと携帯を閉じた

その時は夜中の3時を回っていた

漣「別れたの俺のせい？」

あ「違うよ気にしないで！！」

漣「ならいいけど・・・もう寝ようか」

あ「そうだね」漣今日はありがとうね」

漣「気にすんなって！！バカ

俺ソファで寝るからベッド使いな」

あ「バカってなに！！まあありがとう」

漣「バカは風邪ひかないって言うからベッドじゃなくてもいいと思

つたけど、一応あみ女だからな♪藁藁」

あ「バ〜〜カ」

漣「はいはい。。もう寝るぞ」

第五話・・・1回目の悲劇

2日後

ガヤガヤ声が聞こえる

俺は起きた・・・

漣「ウザッ・・・」

俺は皆に聞こえないぐらいの声で言った

俺の家には数人のダチが集まって話していた

翔「起きるのおせよ」

今話しをかけたのが親友の翔汰

漣「はっ関係なくねえっていつかなんで居んの?」

辺りを見回すと、あみが笑顔だった。

俺は安心した。

俺はこの時決意していた。あみに告る事を・・・

だけど俺は見えてしまった。以上にあみと秀仁がイチャイチャしてる所を。

俺はショックだった・・・

漣「あみと秀付き合ってたの？」

秀「そっか漣寝てたから知らねえんだっただな」

そう俺は昨日ずっと寝てたらしい・・・（寝すぎだな）

秀「俺等ラブラブだろ→→」

と言いながら秀仁はあみを抱きよせた

漣「そうだな（笑）」

俺は今すぐ出て行きたいぐらいショックだったけど笑顔でそう言った

漣「俺タバコ吸ってくる」↑まだ15やけど・・・

皆「は~~~~い」

俺は外に行きタバコを吸っている

漣「ハア〜早く告つとけば良かった〜」

そんな事を考えていると後ろから愛が来た

愛「漣」

漣「わっ!」

俺はビックリしてタバコを落とした

愛「ビックリしすぎ（笑）」

漣「なんだよ・・・」

愛「漣ねあみの事スキだったでしょう?？」

漣「ドキッ／＼はっそんな訳ねえゝだろ!！」

愛「もういいよゝ」

そのあと愛は秀達の事を話してくれた

俺が寝ていた2日間の間あみは泣いてたらしい・・・

そこに秀仁がきて相談にのってたり優しくしてくれたらしく付き合
ったらしい・・・

でも展開はやすぎと俺は思っていた

愛「あみね本当は漣の事スキだったんだよ→→なのに漣は鈍感だから
きずかないし。。」

はっ!!あみが俺の事スキだったのかよ・・・

俺バカじゃん。両思いだったのにゝ!!

漣「もういいよゝ（笑）」

俺はこの後もう1つの悲劇くると知らなかった。

第五話・・・1回目の悲劇（後書き）

2日後

ガヤガヤ声が聞こえる

俺は起きた・・・

漣「ウザッ・・・」

俺は皆に聞こえないぐらいの声で言った

俺の家には数人のダチが集まって話していた

翔「起きるのおせよ」

今話しをかけたのが親友の翔汰

漣「はっ関係なくねえっていつかなんで居んの？」

辺りを見回すと、あみが笑顔だった。

俺は安心した。

俺はこの時決意していた。あみに告る事を・・・

だけど俺は見えてしまった。以上にあみと秀仁がイチャイチャしてる所を。

俺はショックだった・・・

漣「あみと秀付き合ってたの？」

秀「そっか漣寝てたから知らねえんだったな」

そう俺は昨日ずっと寝てたらしい・・・（寝すぎだな）

秀「俺等ラブラブだろ→→」

と言いながら秀仁はあみを抱きよせた

漣「そうだな（笑）」

俺は今すぐ出て行きたいくらいショックだったけど笑顔でそう言った

漣「俺タバコ吸ってくる」↑まだ15やけど・・・

皆「は~~~~い」

俺は外に行きタバコを吸っている

漣「ハア〜早く告つとけば良かった〜」

そんな事を考えていると後ろから愛が来た

愛「漣仁~~~~」

漣「わっ!~!」

俺はビックリしてタバコを落とした

愛「ビックリしすぎ（笑）」

漣「なんだよ・・・」

愛「漣ねあみの事スキだったでしょう??」

漣「ドキッ／＼はっそんな訳ねえっだろ!!」

愛「もういいよ」

そのあと愛は秀達の事を話してくれた

俺が寝ていた2日間の間あみは泣いてたらしい・

そこに秀仁がきて相談にのってたり優しくしてくれたらしく付き合
ったらしい・

でも展開はやすぎと俺は思っていた

愛「あみね本当は漣の事スキだったんだよ→→なのに漣は鈍感だか
らきずかないし。」

はっ!!あみが俺の事スキだったのかよ・・・

俺バカじゃん。両思いだったのに!!

漣「もういいよ」（笑）」

俺はこの後もう1つの悲劇くると知らなかった。

第六話・・・2回目の悲劇（前書き）

大事な人の死とはとても辛い事です

第六話・・・2回目の悲劇

俺がタバコを吸いながらイライラしていると電話になった

電話の主は先輩の心さんだった

漣「もしもし？」

心「漣か！？」

漣「そうですけど何かあったんですか」

先輩の声は、いつもより声のトーンが下がっていた。

心「・・・・・・・・あんな」

漣「はい・・・・」

心「進が・・・死んだ・・・・」

漣「えっ・・・・・・・・」

進とは俺が本当の兄貴のように、してたっていた大事な人・・・

その人が死んだ・・・・・・・・

俺はその場で崩れ落ちた。。。

沈黙が続いていた・・・・・・・・

沈黙を破ったのは心さんだった。

心「漣??」

漣「う．．そでしょ．．?」

俺には何が起きたのか分からなかった。

心「本当なんだ．．事故だって」

ありえない。。。この間まで俺と遊んでたのに．．

俺は今までの事を考えてた。いつも苦しい時助けてくれたのは進さんだった

漣「．．．．」

心「病院くるだろ．．?」

漣「はい．．．」

俺は電話を切った後急いで病院に行った

病院に行くと色んな人達がいた

そこには進さんのお母さんも居た．．

俺は頭を下げ進さんの居る部屋へと行った。

部屋に入ると変わり果てた先輩の姿があった。

俺は先輩の顔にのっていた白い布がかけてあった。

俺はその場に立って泣いていた

恥ずかしさなど忘れ声を出しながら・・

これが初めてだろう声をだして人前で泣くのは。

俺はその日から変わった。。。

第六話・・・2回目の悲劇（後書き）

俺がタバコを吸いながらイライラしていると電話がなった

電話の主は先輩の心さんだった

漣「もしもし？」

心「漣か！？」

漣「そうですけど何かあったんですか」

先輩の声は、いつもより声のトーンが下がっていた。

心「・・・・・・・・あんな」

漣「はい・・・・」

心「進が・・・死んだ・・・・」

漣「えっ・・・・・・・・」

進とは俺が本当の兄貴のように、してたっていた大事な人・・・

その人が死んだ・・・・・・・・

俺はその場で崩れ落ちた。。。

沈黙が続いていた・・・・・・・・

沈黙を破ったのは心さんだった。

心「漣??」

漣「う．．そでしょ．．?」

俺には何が起きたのか分からなかった。

心「本当なんだ．．事故だって」

ありえない。。。この間まで俺と遊んでたのに．．

俺は今までの事を考えてた。いつも苦しい時助けてくれたのは進さんだった

漣「．．．．」

心「病院くるだろ．．?」

漣「はい．．．」

俺は電話を切った後急いで病院に行った

病院に行くと色んな人達がいた

そこには進さんのお母さんも居た．．

俺は頭を下げ進さんの居る部屋へと行った。

部屋に入ると変わり果てた先輩の姿があった。

俺は先輩の顔にのっていた白い布がかけてあった。

俺はその場に立って泣いていた

恥ずかしさなど忘れ声を出しながら・・

これが初めてだろう声をだして人前で泣くのは。

俺はその日から変わった。。。

第七話・・・新たな出会い

俺は家に帰った。

ダチから声をかけられたが無視し自分の部屋に入って寝た。

次の日

俺はその日から荒れていった

遊びに行き人とぶつかる度に喧嘩をうった。

今日も翔汰と2人で遊んでいた。

翔「どこ行く？」

漑「カラオケでも行く???」

翔「またカラオケ!!」

漑「またって・・・いいじゃん!!」

俺は今週5回ぐらいカラオケに行っていた

ドン!!!

俺は人にぶつかった。

俺はいつものように喧嘩をうろうと振り返るとそこには女2人が立

っていた。

俺はぶつかった奴を睨んでいると隣に居た翔汰が声をだした

翔「おっ、奈々じゃん」

奈々というのは翔汰のダチらしい・・・

奈「久しぶりっ、こっちが友達の杏奈」

俺にぶつかった女は杏奈というらしい。。。

この女の第一印象はムカツク女だと思った。

でも良く見ると髪形があみに似ている。。。。

服装などは今時の子で、ちょっとギャルっぽく見えた

俺はちよつとドキツとした

漣「お前人にぶつかったって謝りもしねえの!!」

杏「お前じゃなくて杏奈!!ていうか、ぶつかったのそっちじゃん」

漣「そっちじゃなくて漣仁です!!」

真似をしながら言った

杏「意味分かんない」

杏奈は怒って下を向いた・・

俺は面白くて笑っていた。何ヶ月ぶりだろう・・・

あみからの失恋から二ヶ月たっていた。

翔「俺等さゝ今からカラオケ行くんだけど行く？」

奈・杏「行く〜」

漣「なら奈々ちゃん行こうか」

俺は笑いながら言っていると杏奈はこっちを見ながら怒っていた

俺は面白かった

漣「杏奈の顔おもしろ〜」

杏「最低!!」

漣「ゴメンって怒るなよ!!」

そんな会話をしながらカラオケ屋についた。

第八話・・・変な自分

五時間後・・・

漣「のど痛い～～歌いすぎたし!!」

奈「でも漣歌うまいね。。ねっ杏奈?」

俺は杏奈の方を見た

杏「微妙～～」

漣「はっ杏奈より上手いし」

俺は少し期待してた。杏奈が上手いと言ってくれる事を・

俺はカラオケ屋にいる間ずっと杏奈に目がいつていた。

翔「俺さっ、奈々送るから杏奈送ってあげな!（笑）」

漣「はっ意味分かんねえ～。それなら俺が奈々送っていく」

杏「いいよ一人で帰るから」

そう言って杏奈は1人で歩きだした

翔「俺が奈々送るから早く行けっ」

漣「嫌だ!!俺帰る」

そう言いながら杏奈が行った逆の方向に歩きだす

俺はまだ、あみが好きだ！！だから他の女には興味ないと思ってた。

でも・・・

俺は体を逆に向け杏奈が帰った方に走りだした

走っても走っても杏奈がいない

漣「俺何してんだろう・・・」

俺が諦めて帰ろうとして歩きだしたら杏奈がコンビニから出てきた

杏奈は俺に気付きビクリしてる

漣「帰るぞ！！」

杏「なんで居んの??」

漣「いちゃダメですか?」

杏「・・・・・・・・・・」

漣「やっぱ女が1人だったらオジサンから襲われると思って（笑）」

杏「はっ大丈夫です」

そう言いながら歩きだした

俺はとっさに杏奈の手を握った

俺は自分でもビックリしていた。でもそれ以上に杏奈はビックリした顔だった

漣「送るから」

杏「うん・・・」

俺は杏奈一緒だったら、あみの事忘れられるのかな・・・と思った

杏「家ここだから」

漣「あつ・・・近いんだな」

俺はドキドキしてたのか早く家についた。

漣「杏奈・・・」

今日の事謝ったほうがいいよな！

杏「うん？」

漣「あつ・・・えっ・・・と・・・おやすみ」

杏「おやすみ」

言えなかった・・・っていうか俺なんでドキドキしてんだろ？

俺は家に帰った

翔汰も帰っていて奈々といい感じだったらしい

俺は毎日のように寝る時あみの事を考えていた。。

でも今日は杏奈の事まで考えてた。

漣「なんで杏奈の事考えてんだよ・・・」

俺は小さい声で呟きながら寝た。

第9話・・・遊び

翔「起きろよ!!」

漣「うぜーーーーーーーー」

翔「今日は奈々達が家にくるって言ったじゃん」

漣「あつ!そうだった」

俺は勢いよく起きたためベッドからこけた

漣「いつて〜〜(泣)」

翔「お前って馬鹿!？」

漣「うつせゝな。。」

翔「飯できてるから食うぞ」

翔はいつも俺を起こし飯を作ってくれる

俺は座り飯を食べた

翔「お前ってバイトとかしないん？」

漣「ホストとか!？」

翔「お前にはあつとるな(笑)」

漣「やる!!」

翔「でも杏奈悲しむと思うよ」

漣「なんで杏奈が出てくるんだよ」

翔「漣って鈍感？」

俺は黙った・・・

前にも言われた鈍感っと言っ言葉を・・・

俺は鈍感なんかな？

漣「俺の事はいいじゃん!!翔は好きな奴おらんと？」

俺はその話から逃げるように聞いた

翔「俺は〜奈々かな」

漣「可愛いもんね♪頑張れよ!!」

翔「うつす!!」

1時間後

ピンポン

翔「来たな」

そう言って翔汰は玄関に行って杏奈達と話してた。

杏奈も来たのか。

3人は俺がいる部屋の方に来た

漣「よっ！！ばか杏奈（笑）」

杏「ばか！！」

翔汰と奈々は笑っていた

そして杏奈は怒っていた

漣「ゴメンって！！ジュース飲む？」

杏「許す訳ないじゃん！！でもジュースは飲む」

漣「はいはい」

俺は冷蔵庫の所に行き中を見た

漣「ジュースないし！」

翔「昨日、漣が飲んだんじゃん」

漣「そうだった！なら買いに行ってくるわ」

俺は財布とケータイを持って家をでる

コンビニに行きジュースを買って家についた。

玄関を開けると靴が沢山あった

漣「誰かいんのかな？」

俺は疑問に思いながら部屋に入った

部屋に入るとそこには・・・・・・・・

第10話・・・キス

そこに居たのは・・・

あみだった

俺は目を合わせる事が出来ず冷蔵庫の方に行った

杏奈とあみが楽しそうに話していた

漣「なんであみが居るん？」

あ「漣に話しがあつて」

俺はちょっと期待した・・・

漣「なんだよ？」

あ「漣の部屋で・・・」

その時杏奈の顔を見たら悲しそうな顔だった

俺はドキドキしてた

俺達は部屋に入る

漣「どうしたん？」

あ「あのね・・・秀仁と別れたんだ」

漣「いつ？」

あ「1ヶ月前ぐらいから・・・」

俺はさつきより期待していた。でも反面不安をもちながら

漣「それだけ？」

あ「それで好きな人に告ったの！」

はっ！！最悪

漣「誰に告った？」

声が震えていた

あ「合コンで知り合った人／＼」

昔からあみは俺の事を相談相手としか思っていない

俺はこの時、今まで我慢していた理性がとんだ

漣「・・・・・・・・だよ・・・」

あ「えっ？」

漣「なんで俺じゃねえゝんだよ」

俺は自分でも何を言ってるか分からないぐらい興奮してた。

あ「えっ！！何言つての？う・・・」

俺はこの時無理やりあみの唇にキスした

あ「濡なんて・・・大・・・き・・・ら・・・い」

俺はあみから一番聞きたくない言葉を聞いた

あみは泣いていた

部屋から出て行き俺は1人ベッドで泣き崩れた

あみが部屋からいなくなつて俺は罪悪感でいっぱいだった

誰も俺の部屋には入ってこなかった

第11話・・・メール

次の日

俺は昨日泣きつかれて、そのまま寝てた。

漑「目腫れてるし」（泣）」

その時

ピロリロリ〜携帯がなった

【受信メール あみ】

漑

昨日の行動は最悪だったけど

訂正が1つあるの・・・

大嫌いって言ったのは嘘だよ・・・

私は・・・漑の事スキだったの

でも秀と付き合い始めてから漑が私に冷たかったから

私の事嫌いと思って、悩んでる時に合コンで知り合った

雅に支えられたの・・・

だから雅が好きになったの。

漣・大好きだったよ

――――

漣「そんな事言ったら諦められないじゃん・」

俺はケータイを握りしめた

そして、あみのケータイに電話した

プルルルルルプルルルル

あ「もしもし」

漣「あみ・・・？」

あ「漣??」

漣「昨日は本当にゴメン。」

あ「うんビックリしたけど」

漣「俺さゝあみの事スキだった。今も好き!!でも諦めるわ

無理かもしれんけど今までは俺があみを幸せにするんだと思ってたけど

逆な行動をとってた・・・幸せになれよ!」

あ「ありがとう」

あみは泣き声だった

漣「泣いてる？」

あ「泣いてない！」

強がつていた

漣「遊びこいよ」

あ「うん！」

漣「じゃゝな」

俺がケータイを閉じるのと一緒に

俺の部屋のドアが開いた

翔「元気か？」

漣「たぶん・俺もう一回寝るわ」

翔「おう！！なんかあったら呼べよ」

俺はもう一度寝た

第12話・・・告白

杏「ねえ起きて〜」

漣「う・・・ん・・・？わっ！！！」

俺の目の前には杏奈の顔があった

漣「お前俺とキスでもしたいの（笑）」

バチッ！！！！！！

杏奈は俺の頬を思いっきり打った

漣「いつてえー！！！」

杏奈は我にかえり

杏「ゴメン・・・本当にゴメン」

杏奈は笑いながら俺の頬を触った

俺はちょっとドキッとした・・・

でも頭では、あみの事を考えてた。

もう諦めないといけないのに・・・俺は・・・

杏「漣〜？大丈夫？？？」

漣「大丈夫」

杏「ちよつと来て」

杏奈は俺の手を握り外に連れて行つた

漣「どうしたん？」

杏「あのね・・・／＼」

漣「うん」

杏「私ね漣の事スキ」

俺は初めて告られた訳じゃないのにドキドキしてた

でも告られた時も俺の頭の中は、あみの事を考えてた。

でも俺はあみの事を諦めないといけない。

だからって簡単な気持ちでは杏奈とは付き合えない

漣「ちよつと時間ちようだい」

杏「うん・・・あみちゃん？」

漣「まあ・・・」

杏「漣の一番は、あみちゃんって事は分かってるよ

私は2番でもいいから付き合っではいいの。」

漣「うん・・・杏奈の気持ちは分かった。」

杏「ゴメンね急に・・・じゃあ」

そう言っつて杏奈は走りだした

俺は家に入り翔汰に相談した

翔汰は俺に自分の気持ちを伝えればいいと言ってくれた

俺はそれから部屋で1人考えてた

漣「俺このごろ引きこもりになってるよ・・・（笑）」

1人ごとを言っつた

第13話・・・俺の気持ち

俺が今一番好きなのはあみ。

でも一番一緒に居たいのは杏奈なんだ

あみが俺の隣から離れる事は一生ないと思ってた。

だって俺とあみは3歳の頃からずっと一緒に学校に行くのも一緒だった

でも現実になあみは俺からドンドン離れている

俺はもう誰とも離れたくないし俺の隣から、あみが居なくなった今でも嫌なのに

杏奈とも離れたら俺はもうダメになると思う

漣「どうしよう」

俺はそれから3時間ぐらい考えた。。。夜の10時だった

俺はベッドの上に置いてあったケータイをとり電話をかける

「もしもし」

電話の主は杏奈

漣「今から会える？」

杏「うん。そっち行こうか？」

漣「いいよ遅いし俺が行くから」

杏「分かった。外で待ってるから」

漣「おう。寒いから風邪ひかないようにな」

俺はケータイを閉じセツトアップに着替えキャップをかぶり家を出た

今日は10月2日このごろ寒くなってきた

俺は少し緊張しながら杏奈の家に向かうと外には杏奈が立っていた

漣「ゴメン・・・寒くなかった？」

杏「うん大丈夫だよ」

俺と杏奈は家の前の駐車場に行きブロックがある所に座った

漣「杏奈・・・あのな俺さ杏奈と別れた後ずっと考えてた

それで俺の中での一番はまだ、あみだと思う・・・

でも今一番ね隣に居てほしいのは杏奈だよ！

こんな俺だけど付き合ってくれる？」

杏「うん。今は一番じゃなくても今から私も頑張るから！」

漣「うん」

俺はそう言っ
て抱きしめた

漣「寒くない？大丈夫か？」

杏「大丈夫だよ！だっ
か行く？」

漣「俺はどこでもイイけど、ラブラブしてゝな！（笑）」

杏「杏奈も→」

漣「なら俺ん家くる？」

杏「うん。。。」

俺達は手を繋ぎ俺の家に行った！！

第14話・キス

今日は寒い日だった

漣「寒いよな」

杏「そうだね!」

漣「これ着とけよ」

そう言つて俺は服を着せた。

杏「ありがとう／＼でも漣寒くない?」

漣「杏奈と手繋いでるから大丈夫です」

俺はさつきより杏奈に近づき手をギュッと握った

杏「漣ってそんな感じの奴だった?」

漣「こんな奴で悪いですか!」

俺は変顔をしながら言った

2人で笑いながら家の前についた

家の中に入ると翔汰が走ってきた

翔「奈々とラブラブしたいから外で遊んで!!」

漣「はっ！！意味不明～～っていつか付き合ってたん？」

翔「付き合ってます！マジお願い！！！！杏奈も！」

翔汰は俺と杏奈に頭を下げてたのんだ

漣「どうする～～？」

杏「いいよ！外行こう」

翔「ありがとう」

俺達はまた外にでた

俺達はそれからカラオケに行ってゲーセンに行きプリクラをとって
杏奈の家に向かった

漣「ゴメンなラブラブできんで・・・」

杏「いいよ～～なら今日はありがとう」

そう言つて杏奈は家に入ろうとした

漣「また今度デートしような！」

俺は杏奈の所に行き

ちゅっ／／

漣「杏奈顔あけーよ（笑）」

杏「／＼／＼恥ずかしいじゃん」

杏奈が玄関のドアを開けた

漣「寒いから風邪ひかんようになー！おやすみ」

杏「うん。おやすみ」

やっぱり俺には杏奈が必要だな。

あみの事はもう考えてはいけないんだよな・・

俺は家に帰り翔汰達のじゃまにならないように部屋に行った

俺はドキドキしてた・・・

第15話・・・デート前

あの日から俺等はずっとメールをしてた

付き合い始めてから10日後初めてのデート♪♪♪

俺は女のように服を真剣に選んだ。

服を着替えピアスを付けキャップをかぶりサングラスをかけ

翔汰の所に行った。

漣「似合う〜?」

翔「俺はいいと思うけど周りから見たらガラ悪い!! まあいつもだけど・・・(笑)」

まあ髪も坊主で金だし剃りこみもバリバリいれてるし!

漣「お前もだろ!」

俺の周りはヤンキー系が多いし女もギャルばかりだし・

そんな俺達は喧嘩好きだしナンパもするし逆ナンされる

でも皆優しいんだよね!

漣「ていうか遅れる〜じゃ行ってくるわ!」

翔「おう！今日は早く来いよ！杏奈も連れて・・・」

漣「はいはい！！！！」

俺はそう言っただけで家を出た

今日の夜ダチを全員集め海で季節外れの花火大会・・・

俺は杏奈の家に行った

杏奈は外で待ってた

漣「今日の杏奈いつも以上に可愛いんだけど！！」

そう言っただけで俺は抱きしめた！！！！！！

杏「離れて恥ずかしいじゃん」

漣「なんでイイじゃん。そんな事よりどこ行く？」

杏「うーん・・・色々（笑）」

漣「なら杏奈が行きたいって言っただけで服屋行こう」

杏「いいの！？」

漣「いいよ・・・その代わり俺が決める！！！！」

杏「決めていいけどエロイのは×」

漣「え〜〜〜〜」

俺等はそんな話をしながら歩きだした

杏奈と手を繋ぎながら！！

第16話・・・デート

俺は杏奈に似合う服を選んできると可愛いネックレスを見つけた

漣「杏奈これ可愛いよな」

杏「本当だ〜可愛い!!」

漣「ペアで買おうか!!」

杏「うん」

俺は2つもってレジに行った

漣「とうとう服買わなかったな(笑)」

杏「本当だ〜」

漣「今から沢山買ってあげるから・・・っていうか、もう時間ないじゃん」

杏「あと30分でしょ〜どっか行く?」

漣「その前に後ろ向いて」

俺は後ろを向いた杏奈の髪をあげネックレスを付けた

杏奈も俺に付けてくれた

漣「これで離れてても一緒だな！」

杏「そうだね！一生大事にするから」

漣「時間少ないな」プリクラでもとって行くか！」

俺達はゲーセンに行ってプリクラ機に入った

漣「杏奈ここ来いよ」

俺はそう言いながら自分の股の間を叩いた

杏「嫌だ！！」

漣「杏奈照れてるだろ」

杏「ウルサイ！！照れてないし」

漣「なら来いよ」

杏奈は照れながらも座った

1枚目は杏奈に抱きついて2枚目は杏奈が俺の頬にチュウゝ3枚目は俺が杏奈の頬にチュウして

最後の一枚はチュウプリ・・・

俺達はゲーセンから出て海へ向かった

漣「途中にダチの家があるから單車借りてそれで行くか」

杏「いいね」

俺達はバイクを借り杏奈を後ろに乗せた

漣「ちゃんと握つとけよ」

俺がそう言つと杏奈が俺の腰にギュツと抱きついた

杏奈の香水の香りがした・・

俺はこの匂いがすると落ち着いた

海に着くと皆来ていてバーベキューの準備をしていた。

全員で50人ぐらい居た。皆俺のダチ・・

タメの奴に後輩から先輩まで来ていた

そこには野菜を切っている、あみもいた・・

隣に居た杏奈の顔を見ると心配そうな顔だった

俺は杏奈をギュツと抱きしめた。

杏奈は驚いた顔をしながらも嬉しそうだった

漣「行くか」

杏「うん」

俺達はいつも以上に手を強く握り皆の所へ行つた

第17話・・・海

漣「遅れた〜〜」

誠「ラブラブなカップルの登場〜〜」

誠とはいかにもチャラそうな感じの奴

亮「おせ〜よ!」

亮はギャル男っぽい

漣「ゴメン・・・」

翔「いいから手伝えよ」

愛「杏奈も手伝って〜〜」

杏奈は笑いながら愛の所へ行った

俺は周りを見ながら笑っていた

あみと一瞬目が合った。あみは今にも泣きそうな目だった

さっきまで皆と一緒に居たのに今は1人で海を見ていた

俺はちよつと心配になった。

翔「さっきからあんな感じなんだよ!」

俺が考えてた事が分かったのか翔がそう言ってきた

翔「心配かもしれねーけどお前が今行ったら杏奈が悲しむぞ・・・」

漣「分かつてる」

俺はあみの事を考えないように雄介サンと亞津と隆3人で砂浜で遊ぶ事にした

竜太「お前ら手伝えよ!!」

俺等はシカトして遊び始めた。。

でも俺の頭の中は、あみの事を考えてた

俺は遊ぶのを止め、あみの所に行った

漣「おい！なにしてんの・・・人魚でも見えた？（笑）」

俺は明るく聞いた

あ「見える訳ないじゃん」

漣「そうだよな!!あみ何かあったら誰でもいいから相談しろよ

1人で抱え込むな・・・」

俺はそう言って、あみの頭を撫でジュースをあげた

漣「皆の所行くぞ！皆心配してんだから」

俺はそれだけ言ってさっきの3人の所に走って行った

それから何分かたちバーベキューを始めて8時ぐらいから花火を始めた

彩「キレイ」

幸「スゲーー」

皆叫びながら楽しんだ

俺はタバコを吸いながら心サンと話してた

健「皆もう帰るぞ」

健太サンの言葉で皆いつせいに帰りだす

俺は杏奈を家まで送り家に帰った

第18話・・・集まり

俺は中学を無事卒業し高校に入学した

俺と杏奈は違う学校に行っていて翔汰と亮と彩耶香と奈々と里奈が杏奈が一緒の学校になった

俺はが行く学校はヤンキーが多い学校だった。

隆と誠とあみと愛とありさが一緒

今は俺と杏奈・彩耶香と亮・里奈と誠・翔汰と奈々が付き合ってた

そして愛とありさと隆は1人であみも彼氏と別れたみたい

高校の入学式から10日たった今日、久しぶりに皆と会う事になった

俺は杏奈にその事を伝えるため電話した

プルルル

漣「もしもし今大丈夫？」

杏「うんいいけど、どうかした？」

漣「今日さ皆で久しぶりに集まる事になったんだけど杏奈も来るよな？」

杏「あゝゴメン！今日ね友達と遊ぶ約束しちゃったんだ」

漣「マジで！！！！それならしょうがねえくな！」

杏「ゴメンね・・・」

漣「分かった。また後で電話するわ！！じゃあな！」

このごろ全然杏奈と遊んでなかった。

俺から誘っても友達と遊んでるし・・・

翔「杏奈来るって？」

漣「来ないだって。友達と遊ぶらしいよ」

翔「ふっふん・・・今日は楽しむぞ！」

俺達は皆が待つてるカラオケ屋に行く前に酒をかって向かった

漣「おくく」

皆「久しぶり」

漣「あれっ今日あみいないの？」

愛「さっき電話したら泣いてた・・・このごろ毎日泣いてるんだよね」

漣「何かあったんかな？俺探してこようか？」

亮「大丈夫。今隆が行ったから」

俺等は心配になってカラオケ屋なのに歌わないで待っていた

あ「ゴメン待たせて」

あみはドアを開けると同時に明るくそう言った

皆「元気じゃん」

皆ほっとしたのか皆番号を入れたした。

そして皆歌ったり酒飲んだりしてた

でも俺は隣にあみが座った事でドキドキしていた。

あみでドキドキするのは久しぶりだった。

今までは杏奈と居たせいか全然ドキドキしなくなっていた

そんな事もあり無言で酒を飲んだ

あみはそれに気付いたのか俺の顔を覗いてきた

漣「どうしたん」

あ「それはこっちのセリフ」

漣「どうもせんよ」

里「あと5分だって」

誠「もうそろそろ帰るか」

俺達はボックスから出た

俺は杏奈に電話した

プルルル〜プルルル〜プルルル〜

いつもだつたら早く出るのに出なかった

翔「かかった？」

漣「かかない・・・」

翔「俺のケータイで電話してみる？」

漣「おう」

俺はそう言つて翔汰のケータイで電話した

プルルル〜プルルル〜プルルル〜

杏「もしもし」

漣「・・・・・・・・」

杏「翔汰???」

？「誰から?もしかして彼氏?早くイチャイチャしようよ」

電話から男の声が聞こえた・・・

漣「お前誰といんの？」

杏「えっ・・・漣？」

漣「だからさっき電話に出なかったのか。最低だな」

杏「ちっ」　ブチッ

俺は杏奈が言い終わらないうちに電話を切った

翔「どうかしたか？」

漣「浮気・・・。マジ最悪。。。今から家に行ってくる」

翔「気をつけろよ」

俺は杏奈の家に行った

ピンポン

杏「は〜い。。。あっ・・・」

漣「さっきの男まだここにおる？」

杏「それは・・・」

漣「親誰もいないん？」

杏「うん」

杏奈の家に入り俺は杏奈の部屋に行った

バンッ

ドアを開けると、そこには裸になった男がいた

俺はそいつの所に行った

ボコッ・・・俺はそいつ殴った

杏奈は叫びながら俺を後ろから抱き止めた

漣「杏奈別れようぜ・・・じゃあな！」

杏「・・・・・・・・・・」

杏奈は何も言わなかった

俺はその時少しは期待してた・・・杏奈が嫌って言うてくれる事を・・・

俺は走って家に向かった

この後何が起こるのかも分からないままムカツキながら・・・

第19話・・・ドンッ

漣「マジ最悪～～俺ちゃんと、あみの事忘れたのに!!」

俺は独り言を言いながら横断歩道を渡った

その時 ドンッ!!!!!!

激痛が走った。。そこから記憶にない。

目が覚めると見慣れない部屋にいた。。そこは病院だった

ナースの人に聞くと、あの時、信号無視をした車が俺に衝突してき
たらしい

俺は起き上がろうとした

漣「いたっ・・・」

あの時と一緒にのように激痛が走った

？「無理せんでいいよ」

誰かが俺にそう言った

顔を見るとあみだった

漣「あみ!!!なんているん??」

あ「なんでって心配だったから」

あみは泣き目だった

漣「なんで泣いてるん」

あ「漣が元気になったからだよ・・・グスツ・・・」

漣「お前人が死ぬとも思ってたん！」

あみは頭を縦にふった

漣「ゴメンな心配かけて・・・」

俺は自分の事を心配してたあみを見て胸はキューとした

俺は泣いているあみの頭をクシャクシャと撫でた

漣「今何時？？」

あ「夜の9時だよ・・・」

漣「そんな時間か・・・もう帰るな遅いしさ！！一人で大丈夫か？？」

あ「うん！！大丈夫だけど。杏奈ちゃん電話したのに来ないよ」

漣「杏奈と別れたんだ・・・」

俺は俯いてそう言った

あ「えっ・・・そうだったの！ゴメン。。。」

漣「いいよ！じゃな～気をつけて帰れよ」

あみは帰って行った。。

あみが出た行った後ずっとあみの事を考えていた

ずっと考えてでた結果が・・・

俺にはあみが必要って事。。

第20話・・・あみ

俺はそれから3日ごに退院した。

3日間ずっとあみはお見舞いに来てくれた

そして退院する日も。

漣「今まで来てくれてありがとうな！」

あ「いいよ〜お礼に今日おごって♪」

漣「もしかして今までそのために・・・」

あ「うん。。。って嘘だけど」

漣「しょうがねえ〜な！行くぞ」

俺達はレストランまで行った

漣「どれ食う??」

あ「パフェ!!」

漣「寒いのに〜」

あ「うん!!大きいやつ一緒に食べよう」

俺は大きなパフェを1つ頼んだ

そして一緒に1つのパフェを2人で食べた

漣「周りから見たらカップルだな（笑）」

あ「そうだね」

あみの顔がちょっと赤かった

漣「マジお腹いっぱい」

あ「私も～～～」

漣「帰るか～～外寒そうだな!!」

あ「うん。今日薄着なのに」

そんな事を言いながらも外に出た

あ「寒い～～～」

漣「はいっ」

俺は着ていた服を着せた

あ「いいの??」

漣「いいよ!寒いけど、あみに風邪ひかれたら困るし」

あ「ありがとう」

俺の家とあみの家は隣同士

あ「そういえば今日ねうちの親が旅行に行ってて漣の家に泊まれって言われたんだけど」

漣「そうそう。昨日おっちゃんが病院に来て言ってたな」

家に着きベッドをキレイにした。

漣「俺ソファで寝るからベッドで寝な！」

あ「うん。。漣ってそんな優しかったっけ？」

漣「思いっきり優しいじゃん！！こんな優しい奴他にはおらんよ」

あ「・・・・・・・・・・」

俺があみを覗き込むと、あみは寝ていた

漣「寝てんのかよ／＼／＼」

俺はあみをベッドに連れて行き寝かせた

あみを置くときに顔がかなり近くなった

俺は一瞬キスしようとした

漣「もう大嫌いって言われたくないしな」

俺はキスする事を止めソファ〜に行つて寝た

第21話・・・俺の気持ち

今日はいつもより早く起きた

あ「おはよう〜」

あみはベッドに座っていた

漣「おう！！なんか新婚みたい（笑）」

あ「ハハハ〜そうだね！」

あみはベッドから降り俺が寝ていたソファーの所に来て隣に座った

漣「あみが俺の隣に座ったの久しぶりな感じがする〜」

あ「そうだよね！！だって漣の隣に座ったらバカになりそうで・・・（笑）」

漣「はっ意味わかんね〜」

俺はそう言っであみの髪をグシャグシャにした

あ「もう」

あみはそう言っで髪を直し俺の髪をグシャグシャにした

そんな風にじゃれあってた。

だけど目が合い2人は無言になり、さっきまで笑っていた顔が真剣な顔になった

俺は顔を近づけた。

俺は前したキスの事を思い出した

でも……

チュツ。。。。

俺はあみにキスした

前したキスと変わらないキスを。

でも変わった事があった、それは……あみが嫌がらなかった

漣「ごめん……。俺なずっと、あみの事を忘れようと我慢してた。

でも、もう無理だ。。。寝るたびにいつも、あみの顔が出てきて俺が

入院してた時も来てくれて俺にはあみが必要な事が分かったんだよ……」

あ「……………私もね前からずっと好きだったよ。前もメールしたように大好きだった

昨日も今も漣とずっといれて嬉しかった。漣が杏奈といった時もヤキモチやいてた

私にも漣は必要な存在だよ」

漣「俺と付き合って・・・」

あ「うん」

漣「やった〜」

俺はソファーから立ち上がり子供のように飛び跳ねた

その日から俺等は幼馴染からカップルとなった

毎日遊んでラブラブで夏休み前には2人は繋がった。

そんな楽しい生活の時1つの電話がなった。

第22話・・・話し

プルルル

漣「もしもし」

あ「漣？あみだけど今から家行つていい？」

漣「いいよ、何かあった？」

あ「家に行つて話す！今から行くね」

俺はいつもだったら喜ぶのに今日は喜べなかった

声がいつもより低かったからかな？

電話を切つて10分たたくらいに来た

外が寒かったせいかあみは顔が真っ赤だった

あ「寒いよ〜」

俺は寒がつてたあみを抱きしめた

漣「あみ冷たいな」

あ「漣は暖かいよ！」

漣「それで話して何？」

あ「あのね・・・」

あみは俺が話しかけると下を向いた

漣「どうしたんだよ!？」

あ「今から言う事真剣に聞いてね」

俺はあみが何を言いたいのか分からなかった。

あ「あのね赤チャンができたの・・・」

漣「嘘・・・!!俺の子？」

あ「あたり前じゃん」

俺はビックリしたけどマジメに考えた

漣「あみは産みたいの??」

あ「私は漣の子だし産みたいよ」

俺はあみに体をむけた

漣「あみ・・・結婚しよう

俺があみの事幸せにするから子供も産もう」

あ「本当にいいの？」

漣「うん！それも、あみを幸せに出来るのは俺しかないでしょ（笑）」

それも俺を幸せにするのも、あみしかないから！！」

俺が言い終わってあみを見ると泣いていた

漣「泣くなよ」

俺はさつきより強く抱きしめた

漣「今何ヶ月なん？」

あ「3ヶ月だよ」

漣「おじちゃんに挨拶行かないとな！

っていうかお父さんになるんだ」

あ「そうだよ。」

漣「早めに行った方がいいよね・明日行く」

あ「私はいいけど。大丈夫？」

漣「大丈夫だと思う（笑）もう遅いから寝るか」

あ「うん」

あみと一緒にベッドに行った

漣「寒くない？もうちょっとこっちに来いよ」

俺はあみを抱き寄せた

あみは泣きつかれたのか寝ていた

俺はあみの額にキスをして寝た

第23話・・・喜び

次の日俺はあみの家の前に来ていた

ドキドキ・・・俺はかなり緊張してた

漣「大丈夫？似合ってる？？」

着慣れないスーツを着て俺はそう言った

あ「大丈夫だよ！漣緊張しすぎ・・・（笑）」

漣「そりや緊張するよ！まじドキドキなんだけど。

煙草吸っていい？？」

あ「いいけど今日何本目？」

俺は朝からずっと緊張してて煙草を5本以上は吸っていた

漣「やつべ～～～死にそう」

そう言いながらも煙草の火を消し玄関の所まで歩いて行った

あみはさきに家に入った

あ「漣入っていいよ」

何回も入った事のある家なのに知らない人の家に入る気分だった

おじちゃん、いやお父さんになる人はソファーに座っていた

まだ何も聞いていないから笑顔だった

俺はリビングに入り

漣「おはようございます」

父「おう漣か、何でスーツなんて着てるんだよ（笑）ホストでもする気か!!」

まあ周りから見ればホストのように見えるかもしれないけど……

漣「今日はちよつと話しがあつて……」

あ「座ろう」

俺とあみは向かい合わせのソファーに座った

漣「あのー俺と……あみの間に子供が出来まして……そっ」

父「はつつ嘘だろ!!」

俺が言い終わらないうちに、そう言った

漣「本当です!!産ませて下さい俺が絶対に2人とも幸せにするんでお願いします!!」

ソファーから降り頭を下げた

あ「お父さんお願い!!」

あみも頭と一緒に下げた

父「ダメだ!!!!お前らまだ高校生だろ!!どうするつもりや」

初めてこんなに怒ってる所を見た

漣「高校卒業したら結婚するつもりです!!そして俺は働くんでお願いします」

父「ダメだ!今日は帰れ!!!!」

漣「嫌です帰りません!!」

父「帰れ!!!!(怒)」

お父さんは俺のスーツを握り外に連れて行った

あ「止めてお父さん・・・」

漣「俺・・・許してくれるまで毎日来ますから」

言った後玄関のドアが閉まった

バンッ

やっぱ難しいな。。

俺はそのまま家に帰った

次の日から毎日あみの家に夜行った

お父さんが帰ってくる時間がいつも夜で俺が行く時は、あみはいつも寝ていた。

最初に来た時から2週間たった日

漣「お願いします。絶対幸せにするんで!!!」

父「はゝ漣がそこまで必死とは思わなかったよ

絶対にあみを泣かせる事はするなよ!!!子供も大切にしろよ」

漣「分かってます。って事はいいいんですか!？」

父「そうだな漣には負けたよ・・・(笑)漣の粘り勝ちだな!」

漣「ありがとうございます」

俺は嬉しさのあまり泣いてしまった。

父「男だろ!!!いつから一緒に住む気なんだ?」

漣「今からでも住みたいけど来週高校を退学する事にしたんですよ。

それで仕事する事にしたんで来週ぐらいから・・・」

父「そうかあゝ漣の親父はイイと言ってるのか?」

漣「それは良いって言ってた」

父「もう遅いし今日は泊まっていくな？」

話してて気付かなかったけど深夜3時を回っていた

漣「はい。。。あみの部屋にですか？」

父「そっちが漣的には嬉しいだろ！！（笑）なんか漣に敬語使われると変な感じするな」

漣「思いっきり嬉しい〜敬語じゃなくていいですか？」

父「そうだな！もう寝ろ」

漣「おやすみなさい」

俺は笑いながらあみの部屋に行った

あみは幸せそうな顔で寝てた

漣「絶対幸せにするから大好きだよ」

ベッドに入り寝ようとした時

あ「絶対？？」

漣「えっ絶対だよ！っていつかいつから起きてた？」

あ「えつとゝ漣が部屋に入って来た時から！」

漣「まじで!!。。。。それと子供産む事いいだつてゝ」

あみは嬉しかったのか泣いていた

あ「嬉しい・・・グスッ（笑）」

漣「あみこのごろ泣きすぎ！子供産まれたら笑われるぞゝ

マジ眠いんだけどゝゝ」

俺は大きくあくびした

あ「寝ようか。。漣頑張ってくれたもんね!!ありがとう」

チュッ／／／

漣「あみにキスされると照れる／／よし寝よう」

あみを腕枕し寝た

第24話・・・指輪

それから俺達は毎日ずっと子供の話しをした。

あみのお父さんから許しをもらって1週間後

あみは俺の家に一緒に住む事になった

そして俺も毎日仕事で忙しくなってきた

でも毎日家に帰るとあみがいるから、その疲れもとぶんだけどね!!

仕事を始めて4ヶ月後

俺は毎月、生活費と別にお金を貯めていた

今日はその金を持ってファッションビルに行った

そしてジュエリーの所へ行き可愛い指輪を探した

俺は指輪を選びレジに行った

店「彼女にですか？」

俺「まあそんなもんです」

店「ありがとうございます」

俺は店から出てあみに電話をした

漣「もしもし、俺やけど今から家に帰るから」

あ「分かったけどそれだけ。？」

漣「そくだよ（笑）」

俺は電話を切り家に向かった

漣「ただいま〜」

あ「おかえり〜」

あみが走ってきた

漣「あみ走ったらダメだって」

俺はあみの所に行き腰に手をまわし、そう言った

あ「ゴメンゴメン（笑）向こう行こう」

2人はソファ―に座った

漣「あのさ、渡したい物があるんだけど目閉じて」

あみが目を閉じたのを見て俺はさっき買った指輪をとった

あみの左手をとり薬指に指輪をはめた

漣「目開けていいよ〜」

あ「えっ・・・」

漣「幸せになろうな！っていうか幸せにするから！（照）」

あ「うん！！！」

俺はあみのお腹を触った

漣「3人で幸せになろうな」

それから俺等は毎日ラブラブな生活

時々くだらない事で喧嘩する事もあるけど・・・（笑）

そして今5ヶ月目にはいり安定期に入り久しぶりに・・・

2人がつながる事が出来た。。。

そして今日もラブラブにすごしています。。

第24話・・・指輪（後書き）

今まで読んでくれてありがとうございます。。

次は番外編で俺があつみの事を好きになり始めた時の事を書こうと思ってます

読んでくれたら嬉しく思います

感想がありましたらここまで。。俺の写メもあります。

← ← ←

http://photo.a.walker.jp/pup.ph
p?ID=yutadayo&serial=1879
24&|num=7451

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9834a/>

幼馴染

2010年10月9日05時34分発行